玉葉集　上

特別
へ12
5147
1

ヘ12
5747
1

凡（をよそ）源氏（げんし）の物語といふはむかしにて
にろて卜色てさるすりえ待さ
かる名を元来（ぐゑんらい）をしらぬ人たち
は作称の物語さてし作者（さくしや）と
をしらずつえてこそ所て乃
作りふ賀ひ給ひてえれ哉く

まねくそのこまりかし四顕て
いかめしてえころやとつりけた
さふ人このとなかにたり元来
ときよせなりて源氏悪慕
をやめさせなされんそへみ
くわりまいつそや御まこと第

とそもそも御寺先源氏を須せう
抄紫明河海花鳥よせいまつ
ちんねちうしこつきよひがことを
てそれをたゞして作者の趣を
三源一覧といふ源乃字ハみなか
りうんハ見ろかり三河九みなか

りとにみえけるといふはすゑにこけ
んにらんといふはありしにらんと
見給へて源氏のぬしん（のと）め色
う漢書をよみそれよりもしうれ
人の志を見給へつる物はこころ
ぬることかしもそれをいふとい

ぬふもしけり人々は物語りみえて
田夫野人（でんぶやじん）のても物語はぬいなか
りある之源氏といふはすはら
うみえそめそしひ物してあし内（た）
裏紀（いろせん）とし奇人（きぞん）たちみえけり
みな給ふうへなまいは源氏ならむ

この人のこゝろゆしきとおもひ
たえぬるみちえてせしくみるすへ
ちまきこゝろすたれなよきをすゝとおもひ
給ひて世間に人のこゝろの
るつりとこゝろ給へる世末に
歟り御しふ地こゝろたる人なく

なかふをもしみ人のこゝろ給て
何とも云し田給へつるよきもの
御も世にこゝろ人もなくなりゆくよ
源しもこえみ弁すみて云ぬさ
地よ歟ひありさみぬ梅しも
なかされてをこくさし色たる

かの万代（まんだい）人にあまたみえたりかゝるをも
さゝくるを十体（てい）あるをありけるに
あらをるみな十四体あくありをも
御ゆるさゝ人の風ならあさされ
すこをたうされ催道もてむ
ぞくれやたてまつしひあび

たつるすこそあり催馬楽（さいばら）なと今（やう）
の世にはしらくうたひ給ふ人もなし
けさ道は御して下くし女房（てう）もあな
こゝのこそ忘たらくえて源氏に
ねしんあくさ之催馬楽（さいばら）たいや
く源氏によひれさり源氏に抑揚（よくやう）

の中にて北の方ねたみ給へは催（さいぐ）る
あらみかとを見参へらふ志らう之
源氏といひてさらに世になき
ちごは光君と見るかく
うふみらみへかりさありこそも
源氏の御えしきあやうふ志

ゆかんの人ニさうりけ給ふ所な
らは志う人さきをたる人くみち志
くらりを見そて唐天（てん）ちくの
まえたりけ出（ぞ）し源氏の人には
さしていのちまを玄ろうすゆ
色よめうなしへこさうけれ

してちみなくきをみ給へた
ろ人〻めりぬよみそ見ゆえ
ゆゑしきにゆぬすと覚え
侍りそれ源氏の見居に宇居（二く）
うれ二の見居にあり源氏を紫（吉ろ）
いふは元来（金んらん）をころすと源氏を

らむ人といふは志純よあうす
をいしもは何といふすと給く
志ろ居にはゆそきみすろを源
氏よ見といふなりちまへみく
めんのふくなるへしいにまと（流）
なんとゆつきと作次備え統（見む）

法（のり）をさとくおほけて心のあらし
くらふ人ともなしへかりそれ源
氏といふものは天台（てんたい）の六十巻
うつゝを好む人たちのかく教ゆる
なら花鳥の月にそへてなへてくら
ふくめ御のるえあきと申く
凡人のあさくりをしらされは
るゝに御書と見てもうりとそ
書（かき）のせけ御まことはへ人間（けん）の為
さとりやすくとして何とてさ
傳ふる事あらく佛法（ぶつぽう）とも心の
けをたくみ歌（らく）よみならひ申して

ざいぢやうさんへをとゑんしられ給
へて佛陀（ぶつだ）にへしえんためにて石
山の觀音（くわんおん）女人に生（むま）れ紫式部（むらさきしきぶ）
となりられてつくりはし源氏
のさんアち中道（だう）をもち繪
にあらはしそれをめさるゝめん

こ學人は世になくてたぐひなき（うすく）物
こかんをはげてまてんがみの紙に
人に作（つくら）ら物そくつり心ざしたら
こゝろえてうまれのことを心に念て
ちかくこゝろにたくしく
れうくわりしを廻り佛（ぶつ）清（しやう）十

羅（まう）の中にはかりことおもはぬ人
ありと見えてそりらく多からん人も
方便（はうへん）の説（せつ）なる事はそれはなかりて
おし意（い）み秘（ひ）したるよとをきこしもお
めそへ出さすへの心をもおこして源
氏乃人々ともいはれたるへく届に

やかしき事はちをとにくう御（かけ）
の方便（はうへん）の御説（せつ）法（ほう）よへちうち子を侍
あまりよきんちよ敷をとこう
くし給へてもいくそや待りし
あまりよ物からあらぬ事を物かう
せさ被しもてことをりはけて秘（ひ）

すゞろ世人の心を伸してたすかす
あまりに佛乃御心にはいかゞ侍らん
たゆとえね属に中道（だう）を踏（ふみ）ふ
面しろみこそ見給てハ源氏
え無明（むみやう）乃酒にゑひてめくりぬへく
し迷清をと心かある人ハ源氏乃
紀意（きい）を浮雲（ふうん）してさらりみ奇道（だう）
をたちかまへなりハ志ゆゑん乃へを
めしんの紀画にたうしたる妙を
見まけ源氏なえ布んをとなりてさ
さりとひしゝく除してこえんまて
こゑとゝ奇ととらく浮雲（ふうん）して寄

ちことも絵ふ色しきしりを
ひけを歌及まえるさうつさ
らん人へ源氏よひけさうく
ひろねことなりぬ多つうよ念入
て見絵つくたるあくなみ及れと
絵をもんゑのさづうみ絵色しみ奇

あまひけなりん人へ源氏のことを
ゑ奇をもりて何よりせん物文
立ぬの物語よ源氏のことをひひ
なれはこそふくさとていくら
あへしまえあまたなく源氏もり
なさくとみえしかりしなりはさびたろ

ちゑの志さでん（と）日本唐（う）天ち
くさそみれすをゆゝねすゝて侍ら
たくあきくと志めんのかんぐら
うらくとこさくやまけくてまそあ
そひあくさとにゆらんしえんう
らく侍うへしむもうみれ抱えうたち

のちゝせ夷たく抱いのかなれく
のさいくたんしたう御にてとみ
次（ゆのそ）てくさ（よ）あくみれすをとり出し
書ばけ給へうかりさけみれ太すす
かしにてゆらしをとりさあく
よ秘（ひど）るすすうるすをたく一大すすみれ

周（しう）縁（えん）乃むかしん（たい）後亀し柄（こう）

つかの筆法そまゝ謹書乃御時に

うつしおかくことなかるまじきにて

先（まつ）んのとうく流け後亀亀し時

代（たい）のとき帝（てい）王の御名をあつさ

ぬいまれハ延（えん）喜（き）の御門より一条院

御その御代にはありとありけることを

うたあつめてみな人々の心をたね

として名をとゞめ撰へくりび

三朝にておほせたる也醍醐（だいご）天

皇（わう）朱雀村上冷泉（れいせん）四代

の中にありとあらゆる男女（をとこをんな）のよ

こさめし記ゆうまうひ万るすみなむ
とたを人をとらへて作りなり
光桐壺の御門ハゑんこされや
りとなり光（ひかる）源氏ハ西の宮左
大臣高明（たかあきら）なりすみれかみし后家
見ならふみなかし桐つぼみゆく

朱雀院（すざくのゐん）冷泉院（れいぜいのゐん）今上（きんじやう）四代のあ
いだ源氏一部（ぶ）七十二年なりけ
中より紀さうす見るか延喜（えんぎ）より
四代のあひくよ為者ゝす者ら人
たえ見るか作り人かうよを右え
あまこと様みねしハい作りと鶏

予よ人ハ為し世よありける梅海
ひとへハなくらして為れす
あめ次々をみて為りけあ
らもなきにしもあらねど中乃（拾）
之一部（ぶ）乃中よあつむる人々名を見
誠（漏し）よある人ハ歌撰（せん）ことよ入
さしてあらんやそれをもいて見
ゐて志給そまかありける人
わりなくてそんちゑくみ人ぞ
ま（?）ハ為や為流らんくやありけん
なくさ海くちりを流けて見
大やまと人乃見ありきれ家（安）よ人

とみえ侍るやうにみつから佛（ほとけ）も説（せち）
法（のり）もかくみてし法花經（きやう）のひ
ゆかりをたちし先信解（しんげ）品（ほん）之句
（てい）老子（し）路（かた）乃衣のうらの玉よりゐろ
きてみえなさんの心之書とらく浮（うく）
ひしてうむとえあうく花乃支人

之源氏と四緒色し給何と
ゑ形さりてあらひとつらんえ
給ふ色うきうくいり物書とよむ
まとこらんすらまでしてよ給く
取のうありて心乃おもむきあり
けうつく今見うつてくある

えそらぬすいらぬよ佐はかなれ
なかうすいそれよ佐け君いむ
風に漱えうひたんなかうす
いかぬりおく春れあけかれ春の
れ月よ花をと見秋（あき）乃露（よ）のくさな
さ月け出の音よんをとき雨すゝ

里をぬいり出雨てにさうそく
風をき梅よ待波絶（佐う）たゝ気（さう）かう
見めうゝみれ風てよかていおとは
え待ぬかり花のたゝれひんく
月をあひすうゝ見かひ出かと
待へとしさひ袖をきのすゝ人く

一人なりとも亡霊のかし露と消え
ては猶し草葉のさう陰（くさり）
とめてはあるし　雲井の空
て雑からしりとまるみあらん
やはらよ我人の色そてかゝ山地
語（きよ）をもてことをちろてすれはこと

道よあし　道ならみちを道り
なし作（つくり）くしておもたゝたる
物語世間（せけん）のさかりよりてあるを
天台（てんたい）の六十巻みとなしたるよ
りたりし也源氏も六十帖かきて
為あるみとをもとらしこさんるそみ侍る

ふをと六巻をのけ残る五十四帖（でふ）
もおされ有る之六帖（でふ）ハ宇治（ぢ）のおく
きをして出家の事有る巻けけるに
あり経（たく）蔵之事ハ沢ハいまゐ色ゐ
てあり（のく）て六千て本の事ハ汝と見
えたる抱人も何とも志てみ

しこふちをひてありけり
又源氏よむ者ある人ハ五十四帖の
めくろとみな人の名と書入
ありハ流布本を読とりて付たる
もありとしもて残けたるもあ
先（まつ）一乃巻桐（きり）つほといふへてしもふ

て付られ大内裏(たいだいり)のうちに内蔵(くら)
名ありしに内裏ハ上(うへ)ハ東(ひ)海
の庭らくへたとい海あらりとさき
り下ハ四条しんせんゑんの池と
紀りて内裏(だいり)にてありけり之宮(きう)
は十三の門ありてあまりひろ

さふ継之やうえんありハ海よハ駿
の値(ちか)東寺れや門へハ他人かよひ
て叢(かりひた)羊よめひあらねともある
傑(わけ)元の比かひへ宅庭けて三庫
大(たい)内裏(だいり)たくさらして編(ねえ)終り
きの敵の時ありし名き色

なら桐の木にあるハきりつほなり
萩のうへるをも藤つほ梅のまき
ハ梅つほなりと申也桜ハ南
殿の御庭ようへ所きたれは
ハ[illegible]御[illegible]たまはる也桐壺
[illegible]ハいやのうちめく後の

内裏の内ハ清涼の御殿へら
ひらけるかよき世更衣とかや
あひてまうけかの日の[illegible]ハ[illegible]戸
なるも帝とも帝に[illegible]する
みよりまうき壺に御門と申是
ハ源氏の作意や大内裏の時

桐(きり)つほといふハ門御しく帝つゝれ
ハかり書是流くりしてあり太内(たいたい)
裏(て)ありて壊ハ也る此殿の
名ハかり

二
はゝ木ゝの巻　是(これ)ハ歌をもつて付
たり名の事

はゝ木ゝの心え志てその此み
あはあやかく御すゝひわかれ源氏
十二にて元服(けんさく)し給ひて是(これ)ハ十
六の年の心より給り
うつ世見(かひ)といふ巻の事
空蝉(うつせみ)の羽(は)におく露のこく

迄て世（よの）のくはわかつ神（こそ）の
ちまてもてあそふれしは無か
し年かりかいとゐよりそ
のかひちこのかひあり道（みち）え
はそのかひ也とみ次（つぎ）くとうれ
はゝとはそのかひといふの

すうこはゝとゞにかひといふ
あさきれとぞそれうへきこた
てよとも〇そうかひといふ之一二
三とせをしてかびといつる
うれしくかり
（月かひ）夕かみまれ山名は歌しえてしえ

丁

ふたあかり有てありし相なり夜よ
り九月まて乃すゝなり
三
うつせみの巻（まれ）は又乃名（か）は
こともみえうつせみとはを
かゝる歌よみてなしてこそみえ
中に有事と悔てこそなり

さその詞よみていゑてこそあり
に光をとり合て付たる名之
夕かほは御きのかほる書ら名
乃すゝ紙書て夜秋乃するな
まみちみえ橋乃巻より名あり
末摘（かひ）む乃巻は衣の事

ありしきるこそあるに何に
この思ひも花と袖に燈のん
しきぶは源氏をつくりし
給て此山に籠て有ころ月
のめくりの正月うみゆる年
の正月さてのこしを紀さうか

風し此あくさ紀の次第をとらくるに
まけ給ふを○へ仏性中ね抽之
〔口〕紹巴の説しまれの名は新りまた
ともまきこあるし京に（をか）し女の
春の中にゆりみちれ候の抄お
おし出といふこともありし此（きゝかゝ）筆

とおくは花鳥ゆむのまれよつ華
のすこ尽ちくての雪山華
くしく色しまらむしされの
春見え人是りまへのすく後の
すこあり此まれ雲むしされの
花鳥し来ゆむのまれの次の正

月のすありてすみ次（つき）の年の秋
さそみすなれば此年（ほん）記（き）のはじめの見
まけ猿さすは前（せん）縁（こ）さらいなし
（よ）花の色て春のこしてそゆけ
（ら）ふりのみちれ蝶鳴る年あり
あらひ春の名所之

なかりしや今のきさきあまたゆへ
神のゆるしみえんふともまうかる花
のゑんの明る年なりけるに車
あらそひのことハ源氏の内をう
と女三の宮御禊の斎院に立
給ふさし起侍〇ら青ひて

これ源氏かくもゆゝしかりありなと
見物に出給ふ時のすゝまう
ハミつからも源氏の御すかたをみんと
うきもまうてし車あらそひしくて
くちおしく人いみあつかひにさまれハ
車あらそひの次の年しゆき正月

さてのちに三千年のちにあかしまへ
こゝに紫（ひきれ）のゑてふ井枕（まくら）のすに
けきて三つ一ツといぬてこしるをと
いゆゝしき秘（ひど）するはして三笑大
するに入さりてくみちかれん
まもいろくにゆしくならし

てる名（せいだん）へたちみちくせて書たち
るすそめとれかはゆもるとう
仲くへのあきあいくは仲う
おくそくくは筆をさしそれ
ゆ之

七
さりれのまれ名の所

なき光子かあつかりしおほへい榊葉（さかきて）
かをりし見えあてそおもしあ
かひの巻のおくりみ此月より四
年光の秋まてあり

八
花ちる里　源氏の名の歌
たちはなのかをなつかしみ

花ちる里をとめてそとふ　此巻ハ
さかきの巻とおなし年也

九
須磨　巻の名哥にもことはにも
又花ちる里れゆる年より三十年迄

十
明石　源氏の名無哥
あはさまにひとりみ浦よ朝霧（あさきり）の

松風と人とおもひ風かれ　是也
のまれの是恋の句を次（つぎ）く　二
句のるすあり
土
見纔にくし　此名の哥
物おもひて何とおもふすまうひすほな
かそ月をのくし思ひそめにし略名
の巻の次のこゝろの次三
句みるすあり
かうび
よしのこさぬ　此名はしこしてしと哥
五
よしの是恋のまれの句と見を流く
ちめちれみるすをとれより
月かうび
世は風　巻の名にてして付より

ちとせふとたいは春なかしちかく
しはらの奥を関（せき）やよりこふと
たえまなりをあり関屋を吹よかた
なつかしをありなくてもとおく
こえして見るよ関屋を吹つ（ぎ）てた

十二 縒合（しあはせ） 中秋の名歌よりいでたり

またあからさましあはせとはこされ
なくともいはまさるの縒合（しあはせ）なる
露時雨は雨のひよりも見ゆ紙のくもの
吹の錦にもまさるなるへし

十三 松風 中秋の名の歌

有とりてひとり童つふかう里よ

ゆくしもはらふ松(まつ)かせそて　綴合

のまきの次のこぬるすへ之

十四
うす雲　まきの名の哥

入日さす峯にたなひくうす雲ハ

物思ふ袖にいろやまかへる松風の

妹(あさく)の蓍名こり二三様人のうすあり

十五
槿(あさき)かほ　まきの名の哥

見し折の露わすられぬ朝かほの

花のさかりハ過やしぬらんと

雲の末の秋名さしてあり

十六
をとめ　まきの名の哥

乙女子(をとめこ)も神さひぬらんあまつ袖

かくれ世乃ことをこゝろひ色のまことは都
みえ頃乃年らゆかしく秋をまてあり
十七　玉かつら　まきのはの名乃哥
忘るゝころ君はみえすして玉かつら
いれかはらぬをとも○こゝろならんは春
たえぬかみ庵きこえかくかはる丹年をは

かりかあひしみすかれてもあいはみえて
（あれ）みえまきのはの末乃年にあかれり
（かひ）玉川菖　まきのはの名の哥
こゝ竹の節ゆよひ来て始え
まつふ鶯（うくひす）のうそ○こゝろせよ玉かつら
ゆくへのゆかしき年みえすあり

円（からひ）小てふ　まれの名乃奇
こてふりえさそれかうし心あり
ていまの扇をすれを画きてさらせハ
たい河蓋のおかし奇乃かす之
円（からび）加ゝ御　この名ハ奇りえむして象
まえありむてふと杉かし奇之
円（からにこ）康家　この御きくハいくえともあ
てかけより業（かう）と杉かし奇之
円（からび）かつらひ　奇りて付より
くら火よたちそふ庭乃そつとて
世まハたえせぬおかしの常なる杉か
一
家

月なび
野分　こゝろしてはけしかり
ひとしきり年の秋なり
月なび
傘　欽して付り
うち拂ひ物くるゝ世しにゆき
よいさやうふ定めしやいえし姓
ねの名なり

月なび
蘭（宇之角）　奇して乃名なり
萩野乃露よ風に吹かる
てう西あそれいけよいかてつらる
見ゆきれまなるの鳴ろこれ冬なり
月なび
木枯　こゝろしてはけしかり奇
よもゆきれそらい我とまる

なにとそ御ゆるしてハ海乃ま紀れ篇
ちか頃〻　二三年乃ほとにあり
十八
梅乃枝　君ハ是を調乃て付ら
御きそし　社乃ゆかし書にあり
十九
萩乃うへ葉　こ乃ま紀乃名ハ何
十九
寄　は

朝日にも萩乃うへ葉にとけて
見しおもかけ王すれねたのまんと
いかに寄ん心を内にはなひきて
夕されはさ河に渡そて萩
のうへ葉の移つくいかにして
あり是をもちてほけさらや紀有之

卅

子日　名所

小松ひきて千世のよはひよはひの事

ても野への御あそひある年ことにしへへき

源氏五十四巻の中に若菜（わかな）のまき

り上下とてたてゝ侍るすれはさまか

のるす上巻には六条院（でうゐん）の四十の

御賀（が）の事あり下巻には朱雀院（すさくのゐん）の

五十の御賀の事なれは祝事も

若菜の事ありてみてもあかく

まつりし事にはさくよ

上下にわかれみは唐（たう）書（しよ）の中に

昔太后の（またいこう）のす地（ち）ち把にあり挙

まてゝ上下によこらありそれし
らぬ道いとりれてうつ（ほう）ゝこと
あり後乃うゝ葉乃まゝ紙乃（ごぶつ）筆
此縁にれすゝ紙て毛年くり
正月にれすとみぬゝ書さてを
紅なり

月
まれ乃下け山奏乃筆ゝてよさく
いりとハおもへとも紙ならへ上
（ぐん）奏乃おゝりまらひあ紙すゝとあ
りと紅とあたらよ伊勢たら
ことゝ上下なゝにち伊けて
紅らけ山上下奏乃あひゝよめ

年乃すゝむしなり
是
加し萱　まつ乃名乃哥
うし萱に驀りみれハ秋ハ滝さそ
こゑ人かりまつへき庭乃こゑかう
まれ乃下ふゆろ詠ら秋まても
なあり

是
ちく筆　まつ乃名に哥
ちく筆乃色あへてにかりねを
むかしくかりし哥そ流き　ちく森
うし王本乃まつ乃色乃ふるの
てゆろ秋まてあり
かび
ちく生　まつ乃名に歌

大かたの秋をハうしとしりにしを
ふりすてかたきすゝ虫の声
ちゝ絶（かえ）の時ゟ夏（なつ）秋（あき）まてあり
卅九
夕霧（きり）　まきの名
山里のあはれをそふる夕きりに
たちいてん空もなき心ちして

すゝ虫の巻　秋なり
四十
みのり　まきの名也
たえぬへきみのりなからそたのまるゝ
世ゝにとむすふ中の契を　夕
霧（きり）のまきの時ゟ年ら一年中
のことをそてつまゝせそくみ書なり

廿五

中務卿し　まゑのみ奇
大そうしとかうて中務の宮になて
見えこゑむのゆゑしらせよの浦（このう）
の奏の時る元日（ぐゑんにち）よりもうちたて
うみ年一年中の四季（き）節（せち）木（き）花
りみちよろ流よはけて　六条院の
むかし絵の色にも物かけさせ給ひ
ていみともてるむ御せちゑによりなうつ
ふるまひさへて所に見物させて
いひと書あつめたり〇の物語いま
流るらひと絵もし先中将
まうけしことて絵みなそよろこひ

さて源氏ハひかるにてちりかよは
にほひの上なれとも先ておか
の露のあはれにてとも見えし女四十
四十のそてとも見えしかしてかきと
め宇治（うち）十帖のはしめ哀傷（あいしやう）そて
てより是も生ハ死のかくれぬらん

ちひろはけさ花さくへきころ
のちの先といふ色もなくもろく
見えける庵し
（丹六）
雲かくれ
此巻雲かくれといふ名はかり
して名のみ残りたらんとそんあり

されは中ころくらゐにしたて給ふを
有門空門非有非空門亦有
亦空門と亦有亦空門とは日本
へたてさとりあるをと大師は名て
文言をさとりて論をとこんつまり
一部つゝとありまはしよ光源氏

とい無名書は世をとゝめ給ふは
ひらきみすらう之ひらきみすらは雲かく
書雲かくれはこんせはかりとも迷
色はかりそてさてまみさくいは流
くそて綾を流書そてもいり給へるそ
かくまてへ乃己抄くまふ

風には心を風の給ふ色なりとも雲
それかれハ雲それとつかハして
たゝし給ふ色し伊勢物語かく
そ茂れてくりて給ふ山河井也
物かたりより給ふんうみをはふよ
てられ伊勢物語のちらしを見給ふ

よむし男ありけり十女あり
けりかくあるをそれハたゝ何男（をとこ）
そ何さら女そこしをこそ給ふ色
かはきやよそのくかしとくを
たゝさんかゝれハ古一代の歌（か）撰（せん）かく
よそし人たつましあかいゝれくを

ありけれと為たゞす人へいふなれめ
之歌（か）集（しふ）かくいはさうもいはれたり
かくかに見に見ゆるてくなり
物をさへあつはさねてとやとはあう
たまひてこそ遍御して源氏とい
なの物はまへに御座によりあひさ人の

名にねしは二人をかし遍は何
とかれかれましてたちをつゞさす
に得次たちあやとかゝるへき
は有（うゑもん）門宅（さゑもん）門かるへし源氏をたれ
たまわれまへかくむしきしたりたり
給ふ人ありかりゆへにかくや侍る迄

卅七

まほふ文　此まきの名ハてらす之

源氏雲かくれ給てあるまし是（迷）

らいハゑらけ此まきの名をかりて

大将とかほる人もかほるハ匂宮て

もくろう次

（かうばい）（こうばい）
紅梅　ことえんけうり

玉かつらの浦のうたゝねありて之（たえ）

（月かひ）
竹河　此まきの名竹河新

竹河のうたうち出し一かは

かつらのひめ君の組いたつきやけ巻い

く色のすいてとしかふらこそ

こまちのひたうまけ家歌ア

世をさりて後ひさしかれ大弐（に）の
三位（さんみ）の作なりといへるもあり
説（せつ）には斎（さい）院（ゐん）のせんじなり
なりとも又作り宇治（うぢ）を三位（さんみ）の
作者かはるといふ説（せつ）あり
源氏の中して作る人宇治ハさて
此てふ之物語作者の作何乃
まさしくハ定ハ源氏ハ作りとた
弐三位の作ならんの中してや作る人
源氏といふハ紫の作なりと
みさかれとなくゝ作らハまさ源氏の
ちかく作り斎院のせんじ流

くりかへされハ紫式部源氏作り
かくのことく虚言をかさねけれハ後さ
しるして末代を地獄に堕流侍り

宇治

一　はしひめ　まきの嶋の事

橋姫（はしひめ）の心をくみてたかせさす
さをのしつくに袖そぬれぬる
巻ハ桐（きり）つほの御門の八の宮の大君中君の事
御もすそハちうしなかりける御く
ある冷泉院春宮（とうくう）の御時（おんとき）源氏に
うしろ見し奉りけるとき

てんのたきされ給ふみかとくさ
とりゑ給へ子くこまり給ひ
て春宮よ以への文をたてまつりて
こと志給ひ申つゝかう源してのぬ
よ冷泉院の位（ゑゐ）をとりも給ひける
それより中あくいたりまゐらく
御遁給ひ世よそむきたか兎菩薩
給ひて勅（えらく）にて見そこ給ふ判
を位給ふ安居けて宇（宇）治へ引出
けり給へつゝといかんに鎚（作り）させ給ふ
乃物語さしかりけるとを
御乃まれかりしみあちりよりてうく屋

これに何ゆゑをかしてあらく
に姉〳〵始（ちうめ）て給へらり是源氏の
作（さく）意（い）のにたて之何すもをる
なかるにあまゝてありても巻
かゝりても細（さいかく）流に河（かき）海かへあり給
一部かゝるらと海てむ

古遠てをまへさくもなくして給
より古遠てい海も御ゝによあけら
わすれてはかゝる世にありし人の
こともとかくそらなる紙しくれくる
さへおろゆへかゝへしされ折（かき）ひし
ぬのやそてしならてたくひかる見

定仰りこゑさしくらべ綴くな
こ乃はよわくまつり

二
志ねうゑく　名乃歌
立らんけとたのみし推（志ね）かく
むかしこそそしかよあかりれは巻て
雲ゐまでら十年ゆりよあから

三
庵し二年のまあり
あけまくれはまれの奇
あけ佛きてかれ珠（ちきり）をもとひこ
めぐみしんよらもあへ舞こ乃
あけまくれのまゝ八乃文乃色縁つ
（ゑり）一ゝくしこさみ佛（ゑ）すのでいかり言（たつ）流

くものうへにをくせうそこをなく
だいをめ滝（たき）の糸（いと）をれてまく定を
名香（みやうかう）の糸（いと）といふ也我れゆくあの
うはみしきとふさゆみすゝ
はめ滝（たき）の糸（いと）をあけまきにしも
ひそたなくありそれ糸のあけま

こそ姫君（ひめごぜ）たち糸をくりかし
てむすひ給つゝといぬる之世にあ
ふ君たちあへかゝへゆりて
まてさ也給ふ色紙によみすれ玉ま
ひしておもくすゆへ姫君たち
のまゆりせし雑へ給つゝく

のかたをこまていぬんし三年の
あひくるまあり
四 さうひ　ものの名の哥
此春ハ誰よりさきに見つる人の
うこよ流紀のえ子○をさうひ
あけまれの花露の御る春ぬなす
ゑらり
五 犀らの木　ものの名の哥
やらまくてひ出もハ本流るに
様よ○花いふ流さひうゆさる
ひの秋らの里の春にすあり
六 めなさし花　ものの名の哥

さしとむる葎（むくら）やしけき東（あつま）屋の
あまり程ふるあまそゝきかな
引歌とて無之

七
うき舟　まきのなの歌
たちはなの小しまの色はかはらしを
このうき舟そゆくへしられぬ
源氏物かたりの歌此内にみえて侍

八
かけろふ　まきのなの歌
ありと見て手にはとられす見れは
またゆくへもしらす消えしかけろふ
うき舟のまきかけろふの二巻也わすれ侍

九
手ならひ　まきのなのうたは無之

川のそう津ハ恵心僧都（ゑしんのそうつ）より出た
り此巻ハ浮舟（うきふね）のきみのおもひ
てちふかうへらこさぬとかよを
しあそくゆうしとめうちみ
除こさらみすかう此年ハ冬
こわ三稀んかの春きてみすあり

十
夢の浮はし　此名ハ哥りとてこ
もりとあし　たゝへハ一部の心こえ
思ふ人春人ハ夢そことこそ現なた
あれ物語書ハそこはかなき事を
の浮はしとしハはかなき事をもあま
りあいならはしひよしして

抑源氏物語ことにひ（み）かけゝる人
間（けん）有為（うい）のありさま家よりてこそ
らけりよ人それよ我らかへし
とへかりそめしく何の見たうよ
うくおもてみえて人間に現（けん）世（せ）
後（ご）生（しやう）のねかひをとふてせさせる事

ゆきゝの路（お）さへもに男女の心
めうらしあしきとを何くあそさて。
一夕の中にうみへもちかくへと
見ゐるはさらし若みすをしるを
くらくてえんしてかきおろ
まて源氏ぐやうまうしあけ候

のこりをおきけるとして、た
見さらんは何のせんようならん
み後生をおもひさゝらをも見えんと
おもはん人はみちちかをとふはね
文よりは先を尾にして一部にて
いくおりともふをとけ世間のあり

藤源氏のこんりうにてをこうあたり
うちみす有門空門の中道をまもり
て源氏のあつてかれ人をすゝめあひ
給へるすとらくく〳〵ぬこ尾
五十四帖の巻〳〵みな名をも歌に
詠けることもして詠けるうたよまれ

まは一さんと尋ねもとめては
又かはは義のかはしゝけ
たのみてらく〳〵とさんし給
ぬ色し也くも源氏と名のす
たゝ何ことかくうは世さんゆひ
こうりたのひてい何の〳〵もんかし

あさかは子のひとり也そうりさせて
たくよろう〳〵し一部（ぶ）の諸法（しよほう）
実相（しさう）と見えて亦有（やくう）亦空門（やくくうもん）とよ
く弱給ふ色したさく〳〵と
ちゝたはとうりおひ給ひてら
うせ給しろく人のこかり一部みぬ

十四ふさしの一二帖（ほ）わけおちらし
の物かれ見侍る事ゑ物ともおもひ
絵ふ毎う次一部ゑとことさらく
いろはの屋しにて作ふくとつ（ゝ）ろ
のこともまおりて紀さう物今
羅（ほ）ありけくさもの物の老（おい）の波（かく）よ

霜毎宣のさうひも見よけぬ紀
よ霰（わり）て八ちらの秋ちうて霧（きり）
みちふ筆ぬきぬそれゝうぬ紀
付待えんらくるとえ人まゐ波
せて起ら絵ふとも源氏のまゐれし
のまゐらるもなけれあらゝさうや十四

たふれてんやう三年よりてて
ちそよ御しくは御（よ）ろひのぬさう
いかくゆよ御せてまえ三年らり
たゆいたそて御しくてたゝしゆう
されはよりくえんし給ひすまえ
一二尾ん志神んのかくさまよし
くと春の夕暮のくかなりとかや
秋の月よ心をも御しかくしてゐ
らんしえんかくらしさやうに
らてあれうん心えちゐえれう御
いうせんし東と源氏のちう
ことい（ひ）給ふ尾うし源事いひ

こなたへゆかしく人は見え給ふ
うさも也くもちりをうり
見もそ紀付てまいらせおく
うきしこさ
あなかしこく

以下全て
白紙